

マタイによる福音書16章24節 「自分を否む道」

1A イエスに付いてくる者

1B イエスのところに来る者

2B 自発的な決断

2A 三つの条件

1B 自己否認

2B 日々の十字架

3B 模範なるイエス

本文

マタイによる福音書 16 章を開いてください。午後礼拝で 16 章を一節ずつ読んでいきますが、今朝は 24 節に注目したいと思います。「**それからイエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」**」

16 章において、ついにイエス様が弟子たちと共に時間を過ごし、生活を共にされた中で、最も大事なところに入ります。これまで弟子たちに対して、ご自身が誰であるかを行ないや業をもって示していかれました。そして、あなたがたはわたしを誰だと言いますか？と問いかけます。ペテロが、「あなたは生ける神の御子キリストです。」と、そのまま答えました。イエス様は、それが天の父からの啓示であるとして、幸いであると言われます。ところが、ご自分がユダヤ人の長老たちや、祭司長たち、律法学者から多くの苦しみを受ける、そして殺される、しかし三日目に甦ると言われました。すると、ペテロが、「絶対にそんなことがあってはなりません。」と言ったのです。しかし、イエス様が言われました、「**下がれ、サタン。あなたは、わたしをつまずかせるものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。(16:23)**」天の父から与えられたはずなのに、舌の根も乾かぬうちにサタンからの言葉を語ってしまいました。

その一番大きな原因は、「人のことを思っている」というところです。人としてどんなに良かれと思っていることであっても、人のことを思うために神のことを思っていなければ、それはサタンの欺きであり策略です。イエス様はこれから、十字架への道を進まれます。そこでイエス様の付いてくる弟子たちにも、自分を否んで十字架を負うことをしなければ、付いてくることはできないと言われたのです。そしてこれが、キリストの弟子として生きる道です。

1A イエスに付いてくる者

1B イエスのところに来る者

イエス様のところには、数多くの人がやってきました。群衆はもちろんのこと、弟子たちも十二弟

子以外にも、数多くの人たちがいました。けれども、その中でついて行くのを止めて行った人たちがいます。イエス様がカペナウムの会堂で教えられていた時に、「これはひどい話だ。だれが聞いていられるだろうか。(ヨハネ 6:60)」と言って、「弟子たちのうちの多くの者が離れ去り、もはやイエスとともに歩もうとはしなかった。(6:66)」とあります。イエス様のところには来たのですが、いつまでもついて行くことはしませんでした。

以前、朝の礼拝の説教で取り上げたイエス様の言葉があります。「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。(11:28)」この言葉は、宣教の働きにおいてご自身疲れていた中で、父なる神から慰められ、新たな力を受けたイエス様が、同じように宣教の働きにおいて疲れた者たちに対して語っている言葉なのですが、けれども、全ての疲れた人に対して招きをしているところに普遍性があると思います。

多く人が、イエス様にある安息を求めてこの方のところに来ます。罪を犯してきたことに対して、罪から来る疲れがあります。そして負わなくてもよい重荷を負って、人生を歩んでいます。罪を犯している時は、それが自分を疲れさせ、重荷になっていることが分かっているのに、それでも多くの時間とエネルギーを使ってそれを行い続けます。イザヤ書に、主がご自分の民に「あなたは、長い旅に疲れても、『あきらめた』とは言わなかった。あなたは元気を回復し、それで弱らなかつた。(57:10)」と言われたところがあります。罪を犯すのにどんなに疲れても、また元気を回復してその旅を続けているのです。けれども、イエス様は全ての罪と重荷を負われて十字架で死なれました。それで、イエス様のところに来れば重荷は取れます。疲れがなくなります。こうした動機で、多くの人がイエス様のところに来ます。もう一つは、平安がほしいということでしょう。心が虚しい、何をしても空虚だ。それでイエス様に自分を明け渡せば、そこには神の平安が満ちます。休ませてあげようと言われたイエス様は、平安を与えることのできる方です。

これらは、イエス様のところに来る者たちに与えられた約束です。重荷が取られて、また平安が与えられるということは、多くの人々が求めています。癒しや援助を求めています。けれども、先にどれだけの人たちが、イエス様のところに留まり続けるか？という問いかけがあります。弟子として歩いていくことには同意しても、イエス様について行く時に必要とされること、その犠牲を聞くと、引いて行って、いなくなってしまう人々が数多くいます。イエス様のところに留まるには、そのために伴う大きな犠牲をも覚悟して、それでも留まります。多くの人が、夢を見ます。例えば有名なスポーツ選手になりたいと願います。けれども、そのためには苛烈な訓練が待っていて、それを耐えられる人は極めて少なくなります。これは霊的にも同じです。多くの人が、イエス様にある恵みを求めます。けれども、その恵みに留まっているためには、自分が捨てなければいけないことが出てきます。欲しいものだけをもらう、ということでは、その恵みに留まることさえできなくなります。イエス様について行くために、やらなければいけないことがあるのです。

2B 自発的な決断

ここでイエス様が、「**だれでもわたしについて来たいと思うなら**」と言われていることに注目してください。英語には、if という言葉があり、もし、そう思っているなら、という条件付きとなっています。本人の意思と願いが強く表れています。イエス様について行くことを、誰も強制しません。イエス様ご自身が強制しません。先ほど話しましたように、スポーツ選手に課せられる厳しい特訓は、選手になりたいと思っているからこそ受けるものです。それを、例えば私たち日本国民全員に、課したらどうなるのでしょうか？大変なことになりますね。人によっては、キリスト者として神に求められていることを聞いた時に、「強制されている」と感じます。しかし、自分がそれをしたくないと願うのであれば、しなくてよいのです。事実、多くの弟子と言われていた人たちがイエス様から離れました。イエス様は無理強いして、ここにいなさいと言われてませんでした。いつまでもイエス様のところにいたい、イエス様について行きたいと願うのであれば、ということです。ですから、自分のことを差し置いて、これがいけない、あれがいけないということを、キリスト者は決して言えないのです。自分がイエス様の呼ばれているところについて行きたいかどうか、ということだけ、自ら進んで従うかどうかにかかっています。

2A 三つの条件

それで、三つのことをしなさいとイエス様は言われました。一つは、「自分を捨てなさい」ということ。二つ目は、「自分の十字架を負いなさい」ということ。そして三つ目は、「わたしに従って来なさい」ということです。

1B 自己否認

一つ目の、「**自分を捨て**」とあります。これは、英語の let him deny himself という表現のほうに伝わります。「自分で自分を否む」という意味合いです。かなり強い否認を意味しています。自分のあり方を強く否む、実はもはや自分というものは死んでおり、もはや生きていないとみなすところまで否むということです。これは、人間の本能とは正反対の動きです。自己というものを、私たちは生かしたい、生かしたいと願っていますから。

ところで、自分を捨てるという言葉聞く時に、「これをしてはいけない」「あれをしてはいけない」という規則を守ることでないことを知る必要があります。自分のあり方、心の王座に自分がいたいという、とてつもない固執、その執着心をあきらめて、主にその王座を譲るということでもあります。規則を守っても、その守ること自体が自己実現など、自分の欲求を満たすようになります。パリサイ人の祈りがそうでしたね、自分は断食を週に二度行い、全てのものから十分の一を捧げている、そして姦淫もしていないし、不正も行なっていないし、など、していること、していないことによって、自分の利己心を満たしていました(ルカ 18:11-12)。

また、これは自虐的になるというのとも違います。自分を捨てるとか、自分を否むとか言う時に、

神が恵みによって与えられている私たちの姿、神のかたちに造られている尊い姿までを拒む人たちがいます。そして自分を痛めつける人たちさえいます。私たちは、自分の性格を弄ったり、操作したりするように召されていません。自分を改造するのではないのです。そもそも、どんなことをやっても変えることはできません。むしろ、キリストにあってガラクタのようになっているものを、この方が受け取め、それを直し、聖霊によって建て直してくださいます。そう、私たちが変えられるというのは、聖霊とのコラボであって、キリストに結ばれて成長することなのです。これを、自分自身を痛めつけるようにやってしまうのであれば、それは異教的であり、異端であるとパウロはコロサイ書で話しています。「これらの定めは、人間の好き勝手な礼拝、自己卑下、肉体の苦行のゆえに知恵のここのあるように見えますが、何の価値もなく、肉を満足させるだけです。(2:23)」

自分を捨てることについて、何か自分のすることではなく、既にしていることをあきらめる、といったほうが分かり易いでしょう。自分で何とかしようとする試みをあきらめ、主にお任せになるということでしょう。その自分を捨てるということについて、罨にかかったネズミが、殺されないためにしっぽを齧って、しっぽを引きちぎって逃げてしまうなんていうことが起こるのでしょうか？もしあるなら、霊的にもそのとおりであります。自分がイエス様について行く時に、自分がいつも行っているものが邪魔になっているのであれば、それによって自分自身に痛みが走るとしても、それでも自分の命を救うために行う勇気があります。逆に、愚かな場合を紹介すると、現地人がサルを捕まえる時です。ココナツの中身をくりぬいたところに、お米を入れて、それを罨にします。サルはお米を食べたいと思って手を突っ込みます。けれども、手を握るとその穴から手を出すぐらいの大きさはありません。突っかかってしまいます。そこに、人間がやってきました。サルはその握りしめたお米を手放して、穴から手を出して逃げればよいのです。ところが、それに執着していつまでもしがみつき、ついに人間に捕まえられてしまうのです。

ですから、自分を捨てるということ、否むということは、主に全てを明け渡すこと、自分が主のものとなることです。今、喩えで話しましたように、自分がしがみついているものは結局、最後には自分を滅ぼしてしまいます。ですから、今のうちに手放すのです。しかも、それはイエス様を主とするため、主なる方を主とするために手放します。ペテロの場合は、イエス様がユダヤ人の指導者に引き渡されることを、「そんなことはあってはいけません」と強く思いました。これは、もはやイエス様を主としないで、自分の考えを主としているのです。だから、それを捨ててこの方の言われる通りにしないといけません。イエスが主であるならば、主のままにすることです。

2B 日々の十字架

次に、イエス様は、「**自分の十字架を負って**」と言われました。ここでの文脈は、ペテロに対してイエス様が、天の御国の鍵を彼に渡すといったところです。また、ペテロの信仰告白を土台として、そこにご自分の教会を建てるとしたところです。そして、縛れば天においても縛られて、解き放つと天においても解き放たされるという権威を話したところです。そうした大きな権威が教会に与えら

れるといったところで、なんと自分たちのユダヤ人の指導者がイエス様を裏切り、しかも異邦人の手にかかって死んでしまうとイエス様が言われたのですから、それが衝撃なのです。それは、権威とは真逆の、完全に権利が剥奪された状態を指しています。当時のユダヤ人は、ローマの十字架はよく知っていました。大通りに、見せしめのために犯罪人、そのほとんどはローマへの反逆罪です、その犯人が惨い形で、十字架上で殺されていったのです。このようなことは、会話の中で話題に出すことさえ憚れたことでありました。けれども、これは権威が与えられているのでは、全く異なる、あえて自分の権威を下ろすことに他なりません。

日本語に、「この人の人生で負っている十字架」という言い回しがありますね。過去に刑務所に入るほどの重罪を犯して、出所してからも、この人は十字架を背負って歩んでいるというような言い回しをしています。それは、過去に犯した罪をその負い目を負って自分の残る人生を歩む、という意味で使われています。けれども、ここではそうした意味は全くありません。ここで、「**負って**」という言葉が大事です。自分自身で十字架の木を取り上げるぐらい、自分の意志によって行っていることです。むりやり、負わされているのではなく、自らが負っています。

十字架というのが、ローマの主権に完全に屈服することを意味していますね。自分がどんなにもがこうとも、じたばたしてもだめだということをよく表しています。それと同じように、父なる神の主権に完全に服従することです。主がなされていることに、自分は敢えて明け渡し、そのなすがままにさせることです。「ですから、あなたがたは神の力強い御手の下にへりくだりなさい。(1ペテ 5:6)」自分にとっては苛酷だと思われることが襲って来るとします。けれども、それもまた神の力強い御手なのだということを知ります。それで、父なる神にお任せになるのです。

イエス様ご自身がその姿勢を貫いておられました。「子は、父がしておられることを見て行う以外は、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子も同様に行うのです。(ヨハネ 5:19)」ですから、イエス様が父なる神の意向から外れて、自分でしたいことをしたということは一切、ないのです。それから、ゲッセマネの園での祈りがあります。「わが父よ。できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにはなく、あなたが望まれるままに、なさってください。(26:39)」自分がいくら強く思っても、感じていても、自分なりの考えがあったとしても、それでも父なる神がなされていることに、自分を従わせます。

3B 模範なるイエス

それで、ようやく「**わたしに従って来なさい。**」であります。従っていくということには、そこに目標があり、理想があります。誰でも、自分自身がこれだと思っているもの、云わば神さまのように大切にしていることがあります。その神に対して、自分を従わせていると言っても過言ではありません。どんなことをしても、必ずその大事なことに従って最終的には、決めてきます。自分が何かを成し遂げるために計算をして、計画を立てます。しかし、そこを自分のあらゆる思いを捨て、十字

架を負うように神の御心に自分を従わせ、それでイエス様ご自身を自分の目標にして、この方の言われること、行われることに自分を合わせていくのです。

しかし、ここで中途半端になってしまうことがしばしばです。イエス様から遠く、離れていることは望みません。けれども、近くにいることも拒みます。ちょっと離れたところで、自分は客観的になれると思って、斜めに構えて付き合います。ところが、それはとても危険な立場であり、サタンに狙われやすいです。イエス様が捕えられた後のことを思い出してください、「ペテロは、遠くからイエスの後について、大祭司の家の中庭まで行った。そして中に入り、成り行きを見ようと下役たちと一緒に座った。(26:58)」これが、やばい立場なのです。すぐに敵の攻撃を受け、その餌食になります。従っていくのではなく、遠くからついて行くと、サタンが一気に自分をイエス様から引き離します。

ですから、イエスの傍にいます。この方の近くにいることです。そこから離れないことです。イエス様は、父から離れませんでした。十字架に付けられる時のお姿が、これです。「ヘブル 12:2 この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをもともせず、十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。」喜びさえあったのです。その苦しみをあるのに、なぜ？それは、死んでもその後で甦ることによって、父なる神のみもとに戻れるという喜びです。ですから、キリストのそばにいるものの、特権です。イエス様が目の前の苦しみは耐え忍ばれましたが、それは甦りがその後にあるという喜びによって支えられます。同じように、私たちがイエス様に従っていく時に、その先にある喜びを私たちにはっきりと聖霊が示してくださいます。それは、自分にとっては死を意味しているかもしれませんが、自分に対して死なないといけません。けれども、その先に甦りがあるのです。